494. 最小値投影法による肝門脈のMRアンギオ

MR angiography of Portal vein using Minimum Intensity Projection

東芝メディカルエンジニアリング（株） ○武田忠浩 ・ 榎田淳一
(Tadashi Takeda) (Junichi Makita)
(株) 東芝 那須工場 白井嘉行 ・ 五老健彦
(Yoshiyuki Usui) (Takehiko Goro)

【目的】 今回、ルーチンのスピンエコー法T1強調マルチスライス画像からの、門脈を中心とする肝内血管の描出を試みたので報告する。

【方法】 東芝製 MRT-200 (1.5 T) を使用した。
SE法、TR=500 msec、TE=13~20 msec、
スライス厚7~10 mmのギャップレスマルチスライスにて、励起面の上方と下方に
プリサチュレーションを行ない、肝臓を撮影した。
上記撮影により得た画像から、最小値投影法によりMRA像を作成した。
血管系以外の低信号部分が投影線上にある場合は、それが含まれないようにマスクし
てから、最小値投影処理を行なった。

【結果】 ほぼ均一な肝実質の中に、血管系が黒く描出され、
腹部大動脈、下大静脈、右肝静脈、門脈およびその分岐等を連続的に観察できた。

【まとめ】 ルーチンの肝臓のスピンエコー法 T1 強調画像から最小値投影法により投影像を得る本法は、

1. 血流部分の画像値の低い原画像を用いることで、血流部全体を描出できる。
2. 周辺構造と血流部分を同時に観察できる。
3. 血流部分を出すための追加の撮影を必要とせず、後処理だけで血流部の描出が可能である。